河童小僧

岡本綺堂

頃は安政の末、内藤家（延岡藩）の江戸邸（やしき）に福島金吾という武士があった、この男、剣術柔術が得意で、随って気象も逞しい人物で、凡そ世の中に怖い物無しと誇っていたが、或時測らず一種の妖怪に出逢って、なるほど世には不思議もあるものだと流石（さすが）に舌を巻いたと云う。即ち五月（さつき）の初旬、所謂る降りみ降らずみ五月雨の晴間なき夕（ゆうべ）、所用あって赤阪辺まで出向き、その帰途（かえり）に葵阪（あおいざか）へ差掛ると、生憎に雨は烈しくなった。

当時の人は御存知あるまいが、其（その）頃は葵阪のドンドンと云っては有名なもので、彼（か）の溜池の流れを引いて漲り落つる水勢すさまじく、即ちドンドンと水音高く、

滝なすばかりに渦巻いて流れ落つる水が、この頃の五月雨に水嵩増して、ドンドンドウドウと鳴る音物すごく、況(ま)して大雨の夜であるから、水の音と雨の音の外には物の音も聞えず、往来(ゆきき)も絶えたる戌(いぬ)の刻頃、一寸先も見え分かぬ闇を辿って、右のドンドンの畔(ほとり)へ差掛ると、自分より二三間先に小さな人が歩いて行く。で、自分は足早に追付いて、提灯をかざして熟視(よくみ)ると、年のころは十三四の小僧が、この大雨に傘も持たず下駄も穿かず、直湿(ひたぬ)れに湿(ぬ)れたる両袖を掻合せて、跣足(はだし)のままでぴたぴたと行く姿、いかにも哀れに見えるので、オイオイお前は何処(どこ)へ行くと脊後(うしろ)から声をかけた

が、小僧は見向きもせず返事もせず、矢はり俯向きしまま湿（ぬ）れて行く、此方（こなた）は悶（じ）れて、オイオイ小僧、何処へ往くのか知らぬが、斯（こ）の降雨（ふる）のに尻も端折らずに跣足（はだし）で歩く奴があるものか、身軽にして威勢好く歩けと、近寄って声を掛けたが、この小僧やはり何とも云わぬ。唖か聾耳か、さりとは不思議な奴、兎も角もそんな体裁（だらし）ない風をして雨の中を歩く奴があるものか、待て待て、俺が始末をして遣ると、背後から手を伸して其（そ）の後棲（うしろづま）を引あげ、裳をクルリと捲る途端にピカリ、はッと思って目を据えると、驚くべし、小僧の尻の左右に金銀の大きな眼があって、爛々として我を睨むが

如くに輝いているから、一時は思わず愕然(ぎょっ)としたが、流石(さすが)は平生から武芸自慢の男、この化物奴(め)と、矢庭に右手(めて)に持ったる提灯を投げ捨てて、小僧の襟髪摑んで曳とばかりに投出すと、傍(かたえ)のドンドンの中へ真逆(まっさか)さまに転げ墜ちて、ザンブと響く水音、続いて聞ゆるはカカカカと云うような、怪しい物凄い笑い声、提灯は消えて真の闇。

　汝(おの)れ化物、再び姿を現わさば真二つと、刀の柄に手をかけて霎時(しばし)の間、闇(くら)き水中を睨み詰めていたが、ただ渦巻落つる水の音のみで、その後は更に音の沙汰もない。ええ忌々(いまいま)しい奴だと呟きながら、其(その)夜は其(その)まま

に邸（やしき）へ帰ったが、扨能（さてよ）く能く考えて見ると、あれが果して妖怪であろうか、万一我が驚愕（おどろき）と憤怒（いかり）の余りに、碌々に其（そ）の正体も認めず、遄（はやま）って真実（まこと）の人間を投込んだのではあるまいかと、半信半疑で其（その）夜を明し、翌朝念の為に再び彼（か）のドンドンへ往って見ると、昨夜（ゆうべ）に変らぬは水の音のみで、更に人らしい者の姿も見えぬ、猶念の為に他の人々にも聞合せ、流れの末をも其（そ）れぞれ取調べたが、小僧は愚か、犬の死骸さえ流れ寄ったと云う噂も聞えぬ。で、若し真実（まこと）の人間とすれば、右の如き大雨と云い夜中と云い、殊（こと）に彼（か）のドンドンの如き急流の深淵（ふかみ）に於て、迚（とて）も無事に浮び上れよう筈も無

し、さりとて其（その）死体の見当らぬも不思議、正しく彼の小僧は河童であろう、イヤ獺（かわうそ）であろうと、知る者何（いず）れも云い伝えて、其（その）当分は夜に入って彼（か）のドンドンの畔（ほとり）を通る者もない位で、葵阪のドンドンには河童が住むという評判盛（さかん）であったが、其（その）後別に怪しい噂も無かったのを見れば、河童小僧、飛んだ目に逢って懲々（こりごり）したのであろうか、兎にかく其（その）小僧の尻に金銀の眼が光っていた事は、福島金吾確かに見とどけたと云う事。

因みに記すも古めかしいが、右の溜池界隈には猶一種の怪談があって、これも聊（いささ）か前の内藤家に関係が

あるから、併せてここにお噺し申そう、慶応三年の春も暮れて、山王山の桜も散尽くした頃の事で、彼の溜池の畔に夜な夜な怪しい影がボンヤリと現われる。もっとも其頃の溜池は中々広いもので、維新後に埋められて狭くなり、更に埋められて当時の如く町家立ち続く繁華の地となったが、慶応頃の溜池は深く広く、其末のドンドンには前記の如く河童小僧さえ住むと云う位、其の向う岸即ち内藤家の 邸 の裏手に当って、影とも分かず煙とも分かぬ朦朧たる物が、薄墨の絵の如くに茫として立迷っているのを、通行人が認めて不思議不思議と云い囃す、其の評判を同邸の家中の者が聞

伝えて、試みに赤坂の方へ廻って見渡すと、何さま人の噂に違わず、影か幻か朦朧たる物が水の上に立っていて、其（そ）の形さながら人の如くであるから、何（いず）れも唯だ不思議だ奇怪だと云うのみであったが、念の為に小舟を漕ぎ出して其（その）影の辺（あたり）に近づいて見ると影は消えて何にもない、扨（さて）又旧（もと）の岸へ帰って見ると、彼の影は依然として水の上に迷っている、これは恐らく水中に何物か沈んでいるのではあるまいかと、一同協議の上で、その翌（あく）る朝更に小舟を漕ぎ出し、夜な夜な影の迷う辺（あたり）を其処（そこ）か此処（ここ）かと棹で探ると、緑伸びたる芦の根に何か触る物がある、扨（さて）はと一同立騒いで直ちに此（こ）

れを引きあげると、思いきや此れは年頃二十三四とも見ゆる町人風の男で、荒縄を以て手足を犇々と縛られたまま投込まれたものと覚しく、色は蒼ざめ髪は乱れ、二目と見られぬ無残の体で、入水後已に幾日を経たのであろう、全身腐乱して其の臭気夥しい、一同アッと顔見わせたが兎も角も其死体を舁き上げ、上に其次第を届け出でて、それぞれ詮議に手を尽したが、この男は何者とも分らず、随って其の死因も分らず、いわんや其の下手人も分らず、詮議も竟に其なりけりに済んで了ったとは、何ぼう哀れなる物語。で、彼の怪しい人かげは、正しく此の水死者の幽魂が夜な夜な形を

現わして、未来の救護（すくい）を乞うたのであろうと云う噂で、これを思えば死者に霊無しとも云われまいと、現在その死体を引きあげた一人の昔噺。世にはかかる不可思議の事もあるものか。

（『文藝倶楽部』02年5月号）

＊〈日本妖怪実譚〉より。署名は「不語堂」使用。

底本：「文藝別冊［総特集］岡本綺堂」河出書房新社
　　　２００４（平成16）年1月30日発行
初出：「文藝倶楽部」
　　　１９０２（明治35）年５月号
入力：hongming
校正：noriko saito
２００４年7月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。